

豊かな心をはぐくむ総合的な学習の単元づくりの研究

- 郷土の素材を生かした単元を中心に -

多久市立中央中学校 教諭 田原 優子

要 旨

本研究は、「総合的な学習の時間」において、郷土への関心が深まるような課題づくりや探究活動などを行うことで、豊かな心をはぐくむことができるように、郷土の素材を生かした単元づくりの在り方を探るものである。その手立てとして、教師のアンケートから目指す生徒像を明らかにし、生徒や保護者の実態調査からどのような体験や学習がふさわしいのかを探った。それを基にこれまで郷土と培ってきた信頼や歴史を受け継ぎながら、郷土の素材を生かした単元の流れを2通り開発した。主に課題を見付け、解決し、探究する楽しさを知るタイプと、主に自己の生き方を考えるタイプである。

<キーワード> 総合的な学習の時間 郷土の素材 カリキュラム 課題解決
自己の生き方

1 主題設定の理由

「総合的な学習の時間」が、生きる力をはぐくむことを目的として創設された。本校では、「総合的な学習の時間」を通して豊かな心を育てたいと考えている。本校は、従来からボランティア活動などを通して地域社会との交流を行っているが、断続的・単発的交流であるため、郷土への関心が薄い傾向にあった。「総合的な学習の時間」の実践における反省では、「取組の幅が広すぎて、実感を得にくいようだ」とか、「もっと身近な題材にして生活に根ざしている方がよい」などの意見が教師から出された。これは、郷土の素材を生かしていきっていないということではないかと思われる。もっと地域に目を向け、地域の人々に学び、地道にコツコツと働く人々を直に知る必要があるだろう。いろいろな方々の努力で、自分たちの暮らしが成り立っていることを、体感することも必要なことであろう。

そういう地域に学ぶ体験の積み重ねは、知識の詰め込みだけではない、いわゆる「知の総合化」や、先人の知恵を得ることや、生きる術を知ることにつながるだろう。そのことは「自己の生き方を考える」重要な学習と言える。地域での体験活動などを活発に実践する中で、生徒が自らの取組を振り返り、得たものを発信することで、様々な人々に認められるならば、生徒は大きな自信を得るであろうと考える。

そこで、郷土にある様々な素材を把握し、「総合的な学習の時間」に生かしていくべきであると考えた。そのために数種類の単元を開発する研究をしたいと思う。郷土の素材を生かした学習は、郷土への愛着を深め、誇りをもつことで、自己肯定感へとつながり、豊かな心をはぐくむことができると考える。郷土の素材を生かした単元を開発することは、豊かな心をはぐくむ「総合的な学習の時間」を進めるに当たって、意義あるものと思い、本主題を設定した。

2 研究の目標

豊かな心をはぐくむための、郷土の素材を生かした単元づくりの在り方を探る。

3 研究の内容と方法

(1) 生徒・保護者・教師に対して、「総合的な学習の時間」本格実施のためのアンケートを行う。

ア 教師には、目指す生徒像を探るための調査をする。

イ 保護者には、「総合的な学習の時間」に期待されている点などを調査する。

ウ 生徒には、「総合的な学習の時間」でどのような学習を望んでいるかなどの調査をする。

(2) 「総合的な学習の時間」の進め方について理論研究・先行研究を行う。

(3) 豊かな心をはぐくむための、郷土の素材を生かした単元を開発する。

ア 主に課題を見付け、解決し、探究する楽しさを知るタイプの単元（課題解決型）。

イ 主に自己の生き方を考えるタイプの単元（自己発見型）。

4 研究の実際

(1) 理論研究より

ア 「総合的な学習の時間」の進め方について

多くの文献の調査や、先進校・研究校の取組から、「総合的な学習の時間」は、いろいろなことに直接ふれ合ったり、実際に具体的事実に出会ったりすることが必要であることや、課題解決のためには、目的・具体的な探究活動を行い、自分なりの考えをもち、それを生活に生かすことが重要であることが分かった。また、学習指導要領には、以下のような記述があり、地域との交流の積極的取組が望まれていることが理解できる。(1)

……地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制，地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

イ 「地域」を生かした先進校の事例から

郷土の教材化の一番のメリットは、自分のこととしてとらえやすく、自分の身の回りに関心をもてることであることが分かった。学校は、地域や環境を望ましいものに積極的に作り上げていく諸能力を身に付けるための基礎づくりを推し進めていくべきである。そこに郷土の教材化の意義がある。

・生徒が地域の中に生きている実感をもち、自分の身の回りにある課題に目を向けるようになった。
・生徒も教師も地域活動への関心が高まり、地域とともに生徒を育てていこうという思いが、教師に芽生えたりしている。
文部省「特色ある教育活動のための実践事例集」より一部抜粋

(2) アンケートより（全校生徒とその保護者と教師 2001年10月実施）

生徒に実施した「総合的な学習の時間」を体験した感想を尋ねたアンケートでは、76%の生徒が「楽しい」と感じ、24%が「楽しくない」と感じたことが分かった。楽しい理由は、「自分の学習したいことができる」と答えた生徒が一番多く、次は「数値の評定ではないから」という答えだった。楽しくない理由は、「やりたいことが見つからない」が多く、次は「今までの授業の方が慣れている」だった。これらは、各教科の指導法改善と合わせ、「総合的な学習の時間」の単元を開発する際の大切な要素とする必要がある（図1）。

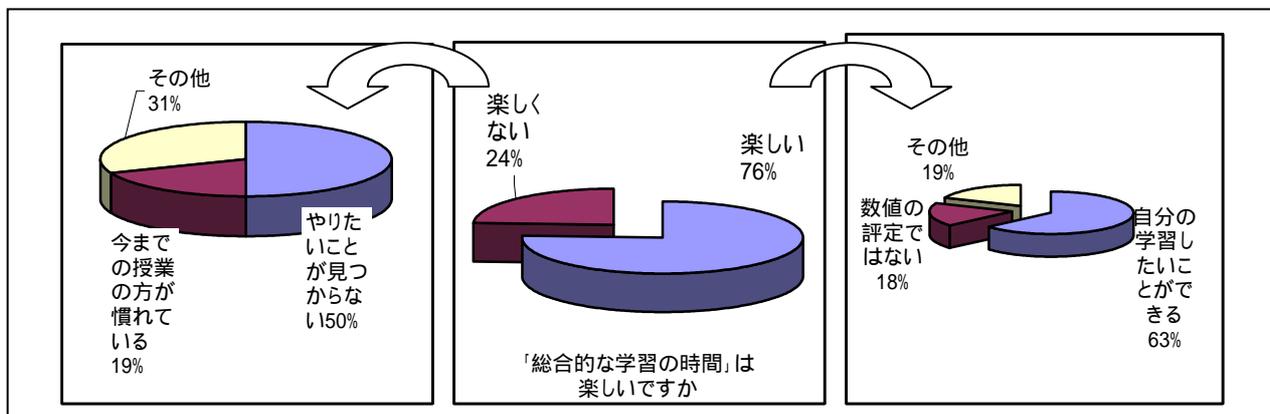


図1 「総合的な学習の時間」についての生徒の感想

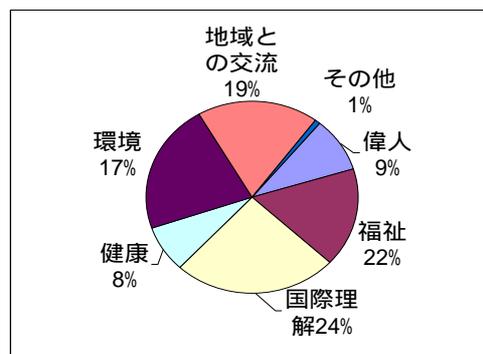
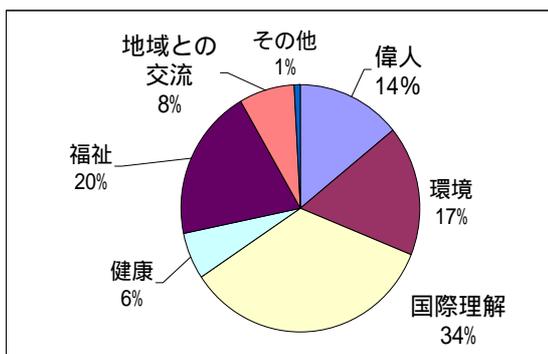


図2 今後どのような学習を望むか(生徒)

図3 今後どのような学習を望むか(保護者)

図2と3は、「今後どのような学習を望むか」を調査したものである。生徒も保護者も、国際理解が最も多く、次に福祉が多かった。これからの国際社会や高齢化社会を視野に入れたものと思われる。表1は、先生方への記述式アンケートであるが、率直で実践に役立つ意見で参考になった。

表1 先生方へのアンケート (記述式より一部抜粋)

1	本校生徒の「総合的な学習の時間」の望ましい題材について	<ul style="list-style-type: none"> ・地域と関連したもの ・身近な問題を取り上げる ・郷土について、身近な方々とふれ合ったり学ぶことができるもの
2	本校の「総合的な学習の時間」で育てたい生徒像について	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら学び、自ら考え、主体的に取り組む生徒 ・自らの疑問点を積極的に解決し、相手を尊重し交流することができる生徒 ・自己を振り返り、よりよくしていこうとする気持ちや行動力を身に付けた生徒

(3) 「総合的な学習の時間」の研究の全体構想

アンケートの結果から、本校の課題や育てたい生徒像を明らかにした。また希望の多い国際理解と福祉を、郷土の素材を活用して実施することにした。

<p>目指す生徒像</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら学び、自ら考え、疑問点を積極的に解決し、学び続けようとする生徒 ・よりよくしていこうという気持ちや行動力を身に付け、相手を尊重し交流することができる生徒 ・自己を振り返り、自己の生き方を見つめ直すことができる生徒
---------------	---

この目指す生徒像の実現のために、育てたい力は**疑問をもつ力、行動力、自己を見つめる力**とした。

図4は、研究の全体構想を示したものである。また、理論研究やアンケートの結果を考え合わせ、本校の「総合的な学習の時間」をデザインした。学年が上がるにつれ、生徒の自主性を重んじる支援体制が必要と考えている。

(4) 「総合的な学習の時間」の単元構想

図5は、単元の大まかな流れを示しているが、課題発見の段階において大きな違いをもたせていることが特徴である。グループ内での課題検討会をもち、課題を現実的にし、最終的には発信・提言に進むタイプと、教師とのカウンセリングで課題を決定し、自己の生き方を考えるタイプである。

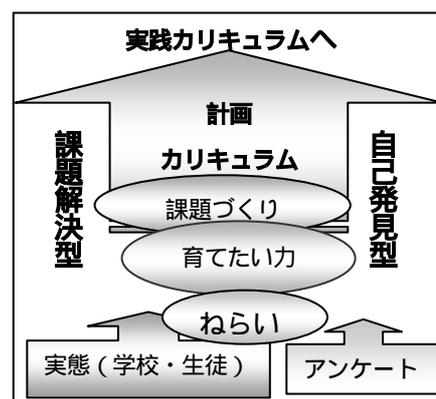


図4 研究の全体構想

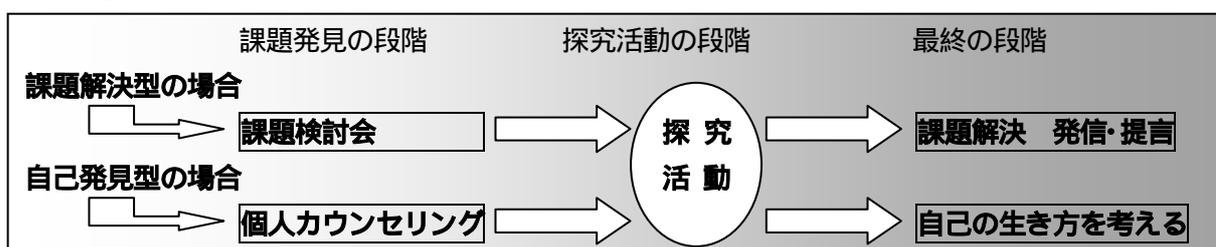


図5 各単元の流れのパターン

「総合的な学習の時間」のねらいを達成するために考えた2つのタイプを、主に課題を見付け、解決し、探究する楽しさを知る課題解決型と、自己の生き方を考える自己発見型とした(表2)。

表2 2つの単元の比較

タイプ	課題解決型の場合	自己発見型の場合
主なねらい	よりよく問題を解決する資質や能力を育てる	自己の生き方を考えることができる力を育てる
主に育てたい力	疑問をもつ力 行動力	自己を見つめる力 行動力
学習形態	学習形態も学習方法も多様	一人一課題
課題の見付け方	体験活動や、今日的な課題の中から、課題を見付ける	郷土についての学習や、実際の生活体験の中から、自己の生き方にふれるような課題を見付ける
課題決定の場面	同じような学習に取り組むグループの中で、課題検討会を実施する 時間的問題や施設設備のこと、調査量など多方面から検討し合い、課題を現実的で取組可能なものに高める	先生との個人カウンセリングで、どこに視点を定めるか、何を掘り下げるか、よく考える
学習時期	全学年	2年後半 3年後半
学習内容	国際理解 福祉	郷土 自分
開発した単元	国際理解 ・東原しょう舎から始まる異文化、伝統文化理解 ・コミュニケーション能力向上を図る そのため ALT や多久市内在住の中国の方に協力してもらう 福祉 ・障害者理解(聴導犬・盲導犬・介護犬・安全マップ作成・車椅子体験・ブラインドウォーク体験から) ・老人理解(施設訪問・独居老人宅訪問等)	郷土 ・郷土に学ぶことを通して、自己の生き方を考えさせるきっかけとする 自分 ・卒業論文的な「総合的な学習の時間」の集大成であることを意識させ、これからの自分の生き方・自分の望ましい姿を求めさせる

(5) 郷土の素材を生かした「総合的な学習の時間」の単元例

これらのことを考え合わせ、「総合的な学習の時間」の単元を6例開発したが、ここでは、主なねらいの違いによる2通りの単元の、1例ずつを次に示す。

タイプ	課題解決型の「総合的な学習の時間」異文化理解を深めよう 国際理解				
単元のねらい	*自分の周囲の現状に対する認識を高め、国際社会を生き抜く力を身に付ける。 *自分と異なる考え方や生き方をする他者の存在を認め、他と共に助け合おうとする態度を身に付ける。				
育てたい力	疑問をもつ力	行動力	35時間の予定		
	学習の流れ	予想される活動	教師の支援	形態	評価方法
課題発見段階 12時間	1 東原しょう舎に行く計画を企画する (2時間) ・演奏会の依頼をする、日程、移動手段など計画を立てる。 ・自分が付けたい力を決める。	多久聖廟には行ったことがあるけど、東原しょう舎は初めてだ、どんな所? 身近に異文化が息づいている、なぜ? 自分は何について学ぼうか?	・課題づくりの1つの手段として校外学習を提案し、自分で交渉させ移動手段も考えさせ、自主的行動をさせる。 ・教師は、感心する、感激する、感動する、疑問を抱くなどの気持ちを導き出す声掛けや態度を心掛け、課題発見の場面を重視する。	集団	行動力 観察
	2 演奏会を実施する (4時間) ・東原しょう舎と多久聖廟を散策する演奏家の話を聞く。 ・演奏会や散策等での気付きを整理する。 ・気付きなどを整理し自分の課題を決定する。	みんな良い意見をくれた、これならできそう。 付けたかった力にどれ程近付けたかな。	・個人がつくった課題は検討会(匿名で課題一覧を作成し互いに助言しあう)をもち、時間や環境等を考慮し、課題が現実的になるように高めさせる。 ・自己の活動を振り返ることは、自己を見つめる重要な作業であることを自覚させる。 ・振り返りの時間を十分に与えて、自己評価カードを書かせる。	グループ	疑問をもつ力 観察
	3 課題検討会をする (5時間) ・課題検討会の実施。 ・課題相談会を受け、先生と相談し、改良する。				自己を見つめる力

	4 自己評価をする (1時間)			個	
探究段階 16時間	5 課題を深める (10時間)	もう一度、取材に取り組んでからにしよう。 あの方々にもお話を聞きたいな？	<ul style="list-style-type: none"> 限られた時間内での各自の調査探究活動なので、生徒の多様な課題に対応できるように教師の支援体制を整える。 教師の特技、趣味、専門分野などを公表しておき“だれに相談できるか”を明らかにしておく。 	グループ又は個	行動力 観察
	<p>予想される活動例 論語について 孔子について 聖廟について 東原しよう会で学んだ人々について 多久市の友好交流都市中国曲阜市について 中国料理をマスターする 等</p>				
最終7時間	6 中間報告会をする (4時間)	皆よくがんばっているな、自分はあそこを取り入れよう。	<ul style="list-style-type: none"> 互いに知ることや、自分の学習を人に伝えることで、気付いたことや学んだことを尊重し、再検討や修正をさせる。 自己評価カードを書かせる。 	個	自己を見つめる力 観察
	7 まとめと自己評価をする (2時間)				
最終7時間	8 交流をする (4時間)	お世話になった方々に来ていただいて、学んだことをお伝えしよう。	<ul style="list-style-type: none"> 調査研究の過程で学んだことや考えたこと、知り得たことを十分理解させ、そのことを行動に移すようにさせる。 	グループ	自己を見つめる力 観察
	9 活動の振り返り (3時間)		<ul style="list-style-type: none"> 時間を十分に与えて振り返らせ、相互評価、自己評価を記入させる。 	個	



写真1 多久聖廟

タイプ	自己発見型の「総合的な学習の時間」				すてきな自分になろう	自分
単元のねらい	<ul style="list-style-type: none"> *身近ないろいろな人々とのかわりを通して、自己の生き方を考える。 *これまでの自分を振り返り、これからの自分を求め続ける気持ちをはぐくむ。 					
育てたい力	自己を見つめる力	行動力	35時間の予定			
	学習の流れ	予想される活動	教師の支援	形態	評価方法	
課題発見段階 12時間	1 ガイダンスをする (2時間)	「総合的な学習の時間」の集大成だ。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの課題解決型の「総合的な学習の時間」の集大成的意味合いもあることを考慮する。 これまでのすべての学習や、生活体験の集大成でもあることを考慮する。 	集団	自己を見つめる力 観察	
	2 自己を見つめる作業をする (3時間)	私の誕生をこんなに喜んでくれたんだ。		個	行動力 観察	
	3 課題の検討をする (2時間)	沢山の人のお世話のおかげで育ってきたんだ。	<ul style="list-style-type: none"> 生い立ちに不安のある子、家庭的に取材なども厳しい家庭は、事前に十分な配慮をする。場合によっては「中学生になってからの自分」という様な限定した振り返らせ方もよい。 	先生と		
	4 課題決定、担当の先生とのカウンセリングの時間とする (2時間)	自分ひとりで大きくなったと思った。	<ul style="list-style-type: none"> 沢山の取材の中からピックアップさせ絵や図なども活用して見やすく仕上げさせる。 個人で探究する。 担当教師などと相談しながら、じっくり課題を決める。 自己評価カードを書かせる。 	個		
探究段階 16時間	5 課題を深める (10時間)	あんなにすごい人だって、若い時は苦労したんだなあ。	<ul style="list-style-type: none"> 調査活動、体験活動など常に配慮する。 さりげない支援を心掛ける。 途中経過を自分のためにまとめさせる。 	個	行動力 観察	
	<p>予想される活動例 郷土出身の偉人の人生と自己を比較し自分像を明確にしてい く(日本初の工学博士志田林三 郎さん・小説家滝口康彦さん 等) 就きたい仕事を研究する 等</p>					
	6 中間発表をする (3時間)			グループ		



写真2 志田林三郎

	7 課題探究活動を深める (2時間)				
	8 自己評価をする (1時間)		・自己評価カードを書かせる。		
最終 7 時 間	9 レポート作成をする (3時間)	私はこうなりたい。 自分が好きになった。	・伝えたい人を招き、なりたい自分像を目の前で宣言させる。状況によっては原稿を郵送して伝えさせてもよい。 ・十分な時間を与えて振り返らせ、相互評価、自己評価を記入させる。	個 個	自己を見つめる力 観察
	10 目指す自分を宣言する (2時間)				
	11 活動の振り返り (2時間)				

(6) 評価について

記録ノートを配布し、計画や挨拶の下書きなどに活用させるほか、毎時間、文章表現と4段階の自己評価チェックも記入させ、自分のために役立たせる。課題発見・探究・最終の3段階終了時には、自分でカードに記入する自己評価をさせる。中間報告会では、教師の観察評価をする。1単元の終了時には、カードに記入する自己評価と、相互評価を行い、教師による学習評価も実施することを考えている。こういった個人内評価が、生徒の意欲喚起となるように考える必要がある。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

アンケートの結果から、「国際理解や福祉」についての興味関心が高いことが分かった。また、理論研究や先進校・研究校の成果からは、郷土に学ぶ姿勢ができたなど「郷土の素材の教材化」の意義が明らかになった。これらを、単元開発に生かすことができた。

ア 課題解決型の「総合的な学習の時間」

課題解決型の「総合的な学習の時間」は、解決したい課題を見付けるということ自体が、重要な学習と考える。解決しようとする場面では、それまでの学習のすべてを活用したり、未知の学習へふれたり、学ぶ喜びを覚えたり、学び方のコツをつかんだりする力などが育つと考えられる。また、課題発見段階では、グループ内で課題検討会を実施し、時間的なこと・施設設備的なこと・移動手段のことなど助言し合って、互いによりよい課題発見・解決力へとつなぐことができるであろう。

イ 自己発見型の「総合的な学習の時間」

自己発見型の「総合的な学習の時間」は、常に自己の生き方を考えさせることで、現在の自分の姿を見つめ直し、未来のなりたい自分像に近づくことができる学習と考える。また、課題発見段階では、教師とのカウンセリングで課題を練り合わせることによって、これからの自分を求め続け、自己を高めていくことができるであろう。

(2) 今後の課題

現在、計画カリキュラムを作成した段階である。今後、教職員が一丸となって、目指す生徒像に迫るための実践にしていかなばならない。目指す生徒像に迫る実践にできるかが、今後の課題と言えよう。

また、そういう実践の積み重ねが、よりよいカリキュラムとなり、生徒に生きる力が身に付くように、年度ごとのカリキュラム評価をどのように実践していくのか、今後の研究が必要である。

《引用文献》

(1) 文部省 『中学校学習指導要領』 平成10年 大蔵省印刷局 p4

《参考文献》

- ・ 山極 隆・田中 博之 『中学校新教育課程「総合的な学習」をどう創るか』 1999年 明治図書
- ・ 文部省 『特色ある教育活動展開のための実践事例集』 「総合的な学習の時間」の学習活動の展開(中学校高等学校編) 平成11年 大日本図書